



宇野ゼミ四度目のステップスグループ展である。毎回異なるメンバーと趣旨が楽しいが、今回はゼミ主である宇野和幸、卒業生である金子元と松尾夕姫である。20代中盤の金子と松尾は東京初進出、ほぼ大学外初展示である。宇野がいない時もあった。それはそれで面白いのだが、やはり宇野がいると展覧会が引き締まる。

今回の展示の宇野の趣旨を引用する。「世界は「状態」の「解釈」として存在している。(中略・引用者) 見つけれそうで見つけれられない。見つけたと思っても見失ってしまう。それは、そこで私達が求めているものの本質が、固定的なモノやそれらとの関係ではなく、それらを含めた状態そのものとしてのありかただからなのだろう。

世界そのものは、概念によって、つまりは関係性のありかたを把握するための解釈としてしか記述できない。それは(中略・引用者)「状態」へのアクセスを試みることに他ならない。(中略・引用者)「状態」のたちあられかたこそが世界を読み解くカギとなる(後略・引用者)。

この展覧会の鍵となるのは、「状態」であることが理解できる。金子は紙にミクストメディアの小品《遠く》を54点、《近く》を3点、計57点、松尾はスパークハーフ(布)にミクストメディアの作品を大1点、小2点、計3点、宇野は《Landscape of accumulation》の中型を2点、小型を3点、計5点展示した。

金子の作品は小が集積して大となり、大が拡散して小となる。松尾の撓んだ作品と、広げられた小品の対比が見事だ。宇野の作品は壁を隔てて展示され、大小の作品の面積が収縮と拡大を繰り返す。三者に共通するミクストメディアは従来分野に限定されることがない「状態」を保持し、見る者は自らをも「状態」に転換すべきとなる。

風景の蓄積を解きほぐすのは、金子の遠近感と松尾の弛みの解析と同様であろう。三者の作品の奥深く沈む壁を押し広げ、その実態を明らかにすることなど何の意味も生まれない。唯、無限に集約する壁に何が刻まれ、何を語っているのかを見る/聞く必要がある。世界は拡張を繰り返す。

